



JADECOMが育成する 「特定ケア看護師」の位置づけと担う役割

JADECOM-NDC研修センター 診療看護師 筑井菜々子



JADECOM-NDC研修センターで「特定ケア看護師」の育成が始まり、すでに3年という月日が経ちました。2015年10月に厚生労働省で「特定行為を行う看護師の育成制度」が開始し、前例のないこの制度に当初から関わり、特定ケア看護師の育成を始めたNDC研修センターはなんともChallengingな挑戦を始めたと思っています。

私は、大学院のNP(Nurse Practitioner)教育の中で診療看護師の教育を受け仕事をさせていただき、その中でNDC研修生の臨床研修支援に携わり、今までに8人の研修生の働く施設で実際に研修生と共に仕事をしました。私の仕事は彼らの病院内での研修制度を整え、毎日の臨床場面を通じて「特定ケア看護師」としての働き方、役割を考え、地盤を作ることです。看護師が医学的知識を医師から学び、今まででは医師が行っていた医療行為の一部を担うということはどういうことなのか、どのようなメリットがあり、何を期待されているのか、このような内容を文面のみで説明することは非常に難しいことでした。そのため実際に各施設に足を運び、話を聞いてもらい、さらに必要であれば、その施設で1～6ヵ月自分が働かせていただくことで、特定行為を行う看護師というものがどのようなものなのか知ってもらう活動を行いました。

このようなユニークな発想のもと、さまざまな施設で働くことができたのは、地域医療振興協会ならではの柔軟な発想のもと実現できたと感謝しております。一見、数ヵ月で各地を転々

とするなんて、乱暴な働き方と考える方もいるかも知れませんが、このように初めての制度を実際の臨床で行うには、一緒に働き知ってもらい、慣れて感じてもらうことが一番手っ取り早く理解していただける良い方法であったと実感しています。

特定行為を行う看護師というと、ついその行為という言葉が先行し、医療行為を行う看護師であると理解されがちです。もちろんそれは間違いではなく、気管カニューレの交換やPICCカテーテル挿入などはまさに医療行為の実践であり、安全かつTimelyに行うことによって臨床の場では大いに役立ちます。しかし、JADECOM-NDCが育成している「特定ケア看護師」の役割は決して特定行為を行うことだけではありません。その医療行為を行う必要性や病態を把握していることが大切なのです。患者さんを総合的に診る能力を身に付けることが最も必要とされていることを理解しなくてはなりません。

例えば、呼吸不全を生じている患者さんがいれば、自分で動脈血採血の必要性を判断し、その血液ガスの結果を分析することによって、今行われていることが患者さんにとってベストなのかを考え、次に必要な治療や行動が予測でき対応できることが求められているのです。動脈採血を医師から依頼され、その結果を何も考えずに医師に報告することが特定ケア看護師の仕事ではありません。多忙な医師は外来や手術、緊急対応などに追われ、入院患者さんにいつも

Timelyに介入できるとは限りません。そこで医師が必要と感じていることや求めている情報を的確に提供でき、いち早く対応できる能力が求められるのです。この制度が始まった当初は、一部の方たちから医師の小間使いのようなものだと言われたことがあります。その当時はその発言で不愉快な気持ちになったこともあります。今は私たちの行っていることは、決して小間使いではなく、患者さんにいち早く対応できるための大変重要な役割と考えています。

協会内の特定ケア看護師の多くは、看護体制に入って動いてはいません。なぜならば任された病棟全体の患者さんをみて関わっていくことが彼らの役割だからです。自分から問題がある患者さんをみつけ積極的に関わっていくこと、これが特定ケア看護師の働き方です。今、重症で集中的に関与しなくてはならない患者さんがいれば、もちろん休憩時間はありませんし、充分な時間を使い関わり続けることは当然です。この臨機応変に動くことができ、その都度何が起こるかわからない状況に迅速に対応できることが特定ケア看護師の役割の一つであり、この仕事の醍醐味でもあるのです。研修生の中には1日のTime Scheduleが決まっていないことにストレスを感じたり戸惑う者もいました。これまで看護体制の中、スタッフとして時間で働いてきた彼らにとっては確かに働き方がガラッと変わり、慣れるまでは戸惑うことが多いと思

います。しかし、これが彼らの病院内でのベストな位置づけであると今は思っています。

看護師として培った、患者さんを看護の視点で見る能力は特定ケア看護師になんでも決してあせていくものではありません。私たちは必ず患者さんさんに触れます。手を触り、体を拭き、話を聞いて、バイタルサインをとり、患者さんのちょっとした異変に「何かが昨日と違う」と感じたり、表情や声のトーンで気持ちの変化に気が付いたりします。その能力は日々患者さんと接する中で身に付いた能力です。そこに医師から学んだ医学的に患者さんを診る力、理論や根拠に基づいた思考や身体所見の取り方、病気の見方、薬理作用や病態生理、このような医学的視点を総合的に診る方法を学び、看護と医学の両方の視点で患者さんをみていくことができます。この両方をバランスよく使い個々の患者さんにあったベストを尽くせること、私はこれが特定ケア看護師の役割であると今までの経験を通じて実感しています。

今はまだマイノリティーな存在ですが、この先、医療の現場になくてはならない存在になれるよう日々勉強し努力することはもちろんのこと、特定ケア看護師の皆さんのが看護と医学の融合の面白さを知ることによって、ますます看護という仕事に誇りと楽しさを実感できる信じております。